



0歳からの教育

楽で楽しい子育てのために

第二話

日本社会の子育て・教育力は何故衰弱したのか

多くの幼児教育の研究者たちが発見した共通のこと

子どもを健全に育成し、「伸びる子に育て」、生き甲斐のある人生を送れるように育てるには、どの様にすれば良いのでしょうか。その答えを探すために、信頼性の高い、児童精神医学、臨床医、発達心理学等に携わる研究者たちの研究成果を見てみると、全て、同じ方向性の発見です。研究で明らかになったことをいろいろな角度から主張していますが、方向性では同じなのです。

名前を挙げるならば、エリック エリクソン、アンリ ワロン、ロバート エムディ、マーガレット マーラー、ジェームス マスターソン、ドナルド ウイニコット、さらにブルース ペリー、リーパーマンなどが挙げられます。日本では児童精神科医の佐々木正美教授（「ぶどうの木」主宰）が上記事項に関する、保護者にも読みやすい本を多数上梓されています。

マリア・モンテッソーリや、その影響を受けた、シルバーナ・モンタナーロ博士達も0歳～2歳が極めて大切だと力説します。また、マリア・モンテッソーリはアレキス・カレルの著書を『創造する子供』の中で引用しています。「人間はこの世に生まれ出た時から始まる第一期の頃が確かに一番豊かなのだ。考え得るあらゆる可能な手段を使ってこの時期を教育の上で活用しなくてはならない。この期を失すれば取り返しのつかないことになる。人生の初めの数年を無駄にせず、最高の注意を払って教育するのが我々の義務である」

しかし、マリア・モンテッソーリは、子どものIQを高めるための特殊なトレーニング等（害になることもある）が必要と言っているのではなく、「生まれながらにして備わっている精神力が発達するのを手助けする点に教育的配慮がなさなければなりません」。ここでいう精神力とは、生命が本来持っている、「自ら成長しようとするDNA」のことと解釈しておきましょう。

なお、注目すべきは、近年、脳科学の進化が著しく、子どもの脳の発達の順序、様子、各種脳内ホルモン等との関連が最新の脳科学で解明され、どの様な子育て・教育が望ましいか、または子どもを損ねるのが次第に分かってきたことです。今までは膨大な子どもの

観察から得られた知見が、脳科学の進化により、脳の作用の内側から解明されてきたことです。また、海外における多くの研究、実践によって多くの新しい事実が分かってきました。ミネソタ大学による研究、マイケル・モーニー、メアリー・ドーリア等の研究、教育実践があります。一旦、「基本的信頼関係の形成」が壊れてしまった場合でも、ある程度再構築ができることもセラプレイの教育実践で分かってきました。

これらの研究で明らかになったことは以下の通りです。

0歳～2歳までの間に母子間（または代わりの人）との「基本的信頼関係」（愛着）の形成に失敗した場合は、思春期（17歳ごろ）になって、反社会的、非社会的な行動に走る傾向が高い。

日本の若者の社会的不適応が広まった理由

- 永い人類の歴史の中で保障されていた、「子どもたちが健全に育つ環境」が消失しました。8歳までの子どもは、本来は当然に存在する環境と関わることで健全に発育します。これを、EEE（Evolutionary 進化的に、Expected 期待された、Environment 環境）といいます。「人との関わり」、「自然との関わり」、「日常生活との関わり」、「知的好奇心をそそる世界との関わり」などです。本来はこの環境の中で、適切に子どもの「伸びようとするDNAを引き出す援助」をすれば、健全に育つのです。この環境(EEE)が日本では急速に失われてしまいました。
-

子どもを取り巻く社会環境・生育環境

肝心な言葉 **カン**（関、間、環、感・・・）
関係性の欠如、自然との関係、人間関係、日常生活との関わり、敏感期など



関係性の欠如

- ・ 人間関係の希薄化
*仲間、空間、時間、世間、間取り
 社会構造が変わり、「自然に子どもは育つ」環境から、保護者が環境を選択して育てる時代になった。
 (社会の教育力の低下)
- ・ 自然との関わりへの希薄化
- ・ 日常生活との関わりへの希薄化
- ・ 知的世界との関わりへの希薄化

2011.11-4Ando

図1 EEEの欠如

- 例えば、核家族であったり、一人っ子であったりすることが、人と関わる機会を薄くしています。また、その親も核家族で育ち、人との関わり合いは苦手であったりするケースが多いのです。苦手なカップル同志が、人との関わり合いの薄い環境で子育てをする。このようにして、放っておくと負のスパイラルが始まります。日本では、高度経済成長、核家族化等と共にこのスパイラルは始まったのです。

*幼稚園受験の両親面接でも、「一人っ子さんですね。どのような子育ての工夫をされていますか」等の質問がされます。この劣悪な子育て環境の中で、どのような対策・工夫をしているのか、子育て実践を聞き、その家庭の子育て力を評価したいのです。また、よくある話ですが、ご主人が地方出身で国立大学を卒業されている場合、幼小受験にお父様が懐疑的な場合があります。しかし、ご主人を育んだ様な環境（EEE）が都心近隣には存在しないことが多いのです。公立校の現状をご存知ないことが多いのです。そこで私立一貫校にて学ぶことが選択肢となるのです。

- 赤ちゃんや子どもには、「自ら発達しよう」とする「命の力」があります。それを引き出してあげる(educate)のが子育て・教育です。マリア・モンテッソーリを始めとする多くの教育者がこの立場です。広義で言えば、福澤諭吉も同じ教育観・子育て観に立っています。「子どもは自分自身の内面に既に生まれながらにして持っている綿密な発達の計画に従い、『人間』を築くために疲れも知らずに励んでいる」（モンテッソーリ著『創造する子ども』）。最近脳科学者も同様なことを言い始めました。ただし、DNA という表現で。
- 日本の教育の傾向として、生まれたときから「人格を形成する」、「人間の全体を形成する」という観念が薄く、人間関係のスタートである、乳児期における母(または、祖母)との「基本的信頼関係」の構築をおろそかにしています。その後も、子どもの社会性構築に努力を注ぎません。多くの幼児教育が「IQを高める」、「天才児をつくる」ことを標榜していますし、「右脳教育」と称して特殊な教育をするところもあります。親も子どもの将来生きていくための人格を形成することよりも、子どもの知能を上げることに関心を寄せている気がします。乳幼児期にIQで計られるものを高めることと、この子どもが将来「伸びる子」に育って社会的成功を収め、生き甲斐のある人生を過ごすこととの相関は示されていません。

次回から、乳幼児期の研究者たちの成果を紹介し、正しい子育て、楽しく楽な子育てについて考えていきたいと思えます。先ずは多くの人に影響を与えたエリクソンです。エリクソンは人間の成長を8段階に分けて、各段階には越えなくてはいけない発達課題があるとします。発達課題は一つずつクリアしなければならず、飛び級はないと言います。

以上